

魅せられて、 私の「歌」道標



岸辺のむこうの父へ

辺見じゅん

私が初めて短歌と出会ったのは、十代の頃である。六十年安保で大学を中退した日々、自らの傷を癒すように詠いはじめた。

しかし、それから数年して中断している。

ふたたび、詠わずにいられなくなったのは、昭和五十年の秋、父（角川源義）を肝臓癌で失ったときだった。今少し正確に記すと、雑誌の仕事で宮崎県の椎葉へと旅立つ前日、主治医から癌の末期であること、二か月持てばよいがと言われたときであったかもしれない。

平家伝説の里と呼ばれた椎葉は、山また山の彼方にある。夏の白く灼けた道のむこうを父が歩いていく姿を何度も見た。しかし、胸の中で父を呼ぶたび、遠くなった。こうして私が歩いている間も父のいのちの灯が小さくなっていくのかと思ったとき、胸に吹きあげたものが自然と歌になった。旅の商人宿で、私は数日のあいだに、百首余の歌をつくっていた。そのうちの五十首が、雑誌「短歌」十一月号に掲載されたが、父には見せなかった。父の肉体がこの世に在るのに、私は死者を悼むかのように詠っていたのである。雑誌が発売されて数日後、父は五十八歳で逝った。椎葉の旅から帰って二か

月余のことであった。

旅のゆめ花火のごとく胸ひらき海境こゆる父のたてがみ

父、昏睡に入る

女らのただに明るく浄むるに朝ひとひらの魔羅となりつる

父、肝臓癌のため死去。

喉ほとけことりと落ちて逝きたまふ昼サ
イレンの鳴りいづるかな

父の死を主治医から告げられる少し前、喉ほとけがことりと落ちた気がした。私には、それが父の死であった。魔羅も喉ほとけも、父の男としての象徴である。私はその二つを詠うことで、父を弔ったのだった。

第一歌集『雪の座』は、昭和五十一年の秋に刊行した。あとがきで、「雪の座」は、父の座である。あの生きもののくぐまっつて眠る北陸の雪の日。ある朝の無限の白さが狂気をはらむふしきな明るさ」と、記している。

このたび、あらためて第一歌集を読み、「父」、「故郷」という自身の歌の原郷を明らかにしているのに驚いた。

私の生まれた富山の在所では、根雪は四月になるまで解けなかった。十一月の初め、急な寒さの訪れと共に、空はいちめんまつ黒な雲に覆われ、稲妻が光りながら渡っていく。

「ブリ起しの来たちゃ、じき冬や」

祖父が呟やく。冬の雷の鳴る頃は寒ブリが獲れるところから、「ブリ起し」と呼ぶのだ。

幼年時代、私は家族と離れ、祖父母や伯父夫婦と暮らしていた。両親が若かったこと、長男である伯父夫妻に子供がいなかったことから祖父母が手離さなかつたようだ。

一年に数度、東京から父が沢山のみやげ物を抱えて訪れる。到着の汽車の時刻はあらかじめ知らされているのに、朝から停車場の黒い木柵にもたれて父を待った。駅ではなく、停車場である。汽車の音が遠くから聞こえてくると、その汽車に父が乗っていないことを知りながらも、胸がふくらんだ。「待つ」ということのとときめきや不安を知ったのは幼年時代からだ。

第二歌集を刊行後、寺山修司さんと対談したことがある。その折、寺山さんは、敗戦によって天皇制が崩壊したとき、父親中心の家庭もまた崩壊してしまった。その意味で戦後の日本文化は「父親不在によって充たされてきた」という気がすると語った。そして私の短

歌を、「不在になってしまった父親との相聞関係があるのが特色だ。幻の父親にこだわり続け、虚像を再建しようとしているところに悲劇性がある」と言われた。

寺山さんは、おそらく父のことばかり詠っている私に、ある種の危うさのようなものを見たのかもしれない。しかし、そのときの私は、寺山さんの歌に殆んど父親が不在のこと、母親を詠うと奇妙に生々しくなるのに関心を抱いていた。

対談をした頃、寺山さんは十数年ぶりに短歌を発表すると言われていた。そのことを尋ねると、ノートに百五十首ほど書いてみたが、かつての自分の短歌を模倣しているだけになってしまっているのが発表する気になれないのだと答えた。

対談の終ったあと、飯田橋の夜の道を歩きながら、

「技術的には今のほうが上手い歌がつくれると思う。でも、どこか下品になっちゃうんだ。もう、昔のような歌は出来ないよ」と言い、ふっと立ちどまり、

「辺見さん、歌を捨てたら駄目だよ。歌を大切にしなさいよ」

呟やくように言われたことが、今も記憶に残っている。

私が歌を始めた頃、父は、「俳句をやればいいのにお父さんがしごけば、いい俳人になれるぞ。大体、おまえのような情緒過多の人間は、俳句のほうがむいてるんだ。俳句は断念の文学だからな」と、言った。

生前、父は若い頃に師の釈道空の「鳥船社」で歌をつくっていたことを語らなかつた。父の当時の短歌を読んだのも、亡くなってからだった。

友多く召されしあとの きびしきや。も
りがたき瞬間を、雪降りいでぬ

角川源義

いくき人と わがあらむ時の近ければ、
心きびしくゐなむと思ふ

父の若き日の短歌はかなりあるようだが、一兵卒として召集された頃の歌が好きである。古風な読み口だが、戦時中の境涯が素直すぎるほど告白されている。戦局が苛烈になり、友人たちは次々と召集されていく。自らも、その日は近い。召集されることは、同時に戦死も覚悟しなければならぬ。それが、当時の日本人のいのちというものの向い方でもあった。

雨いつか雪となりあるくらがりに、病馬
をまもり、立ちてゐにけり

角川源義

そして昭和十七年一月八日、二等兵として召集された父は、金沢の輜重隊に入隊した。雨がいつしか雪となっていく暗い廐舎の片隅で病馬の世話をしていた父は、なにを考えていたのだろうか。

昭和五十八年、『男たちの大和』という戦艦大和を主題にした本を書き上げたとき、一兵卒だった父のことが思われた。もともと、私は父の伝記を書くこととし、それが出来ずに『男たちの大和』となったのである。書くこととすればする程、何も知らなかったことに気が付いた。大切なことを何も語らなかつた人だったからだ。

例えば、なぜ卒業論文を師の折口信夫（釈道空）に提出しなかつたのか。また、折口は、父を研究室の助手に採用せず、友人を選ん

だのか。

亡くなった山本健吉氏は、晩年、折口信夫と父についての一文を記されている。そのうちの二節に、

「この師弟のあいだには、余人の揣摩を許さない、激しい人間愛憎の関係があった。その点では源義君は、他の如何なる弟子とも似ていない。師をして最も注目させ、困惑させ、憎悪させ、また、どうしようもなく惹きつけられた特異な弟子であった」と記されている。学究の徒を志した父が、複雑に紆余曲折する生を送らねばならなかつたのは、「宿命」としか言いようのないものであったと書かれているのだ。

山本健吉氏がこの一文を執筆されたのは、父にふれた折口信夫の手紙を思い出されたからだという。その話をされたあと、

「人間の生き方には、直向きな生と諸向きの生とがある。どちらかを択ぶかはその人間の生き方につながる宿命のようなものだ」と、言われた。

私にはその宿命という言葉が今も重く響いてくる。果して父の生涯は、幸福と呼べるものであったのだろうか。

私にとって、父は故郷の蟹気楼のようなものと思われる。逃げ水のように近づくくと遠くなくなってしまふ。本当の父を知りたいという気持が、父をテーマにした歌を生み出させる源流となつているように思えてならない。

私は短歌をつくる一方、ノンフィクションも書いている。一冊のノンフィクションを書き上げるのに、数年もかかっている。取材が長びくためでもあるが、書き終えると、短歌が奔流のようになって生まれてくる。ノンフィクションでは書き手が黒子であるだけ、



平成元年、現代短歌女流賞授賞式にて、馬場あき子氏、安永藤子氏らとともに。左から四人目が筆者。



辺見じゅん
(へんみ・じゅん)

昭和14年、富山県生まれ。早稲田大学卒。「呪われたシルク・ロード」で作家としてデビュー。主なノンフィクション作品に「男たちの大和」（新田次郎文学賞）「收容所から来た遺書」（講談社ノンフィクション賞、大宅壮一ノンフィクション賞）など。歌人としては「雪の座」「水祭りの棧橋」「闇の祝祭」（現代短歌女流賞）「幻花」の四つの歌集を刊行している。

「私」を表現したくなってしまうのだろう。

昨年、私は第四歌集『幻花』を上梓した。

第一歌集を出版したとき、もう歌集を出すことはあるまいと思つたのに、四冊もの本をつくつたことに自分自身が驚いている。四冊目の『幻花』を出すに至つた期間、さまざまなことに出会つた。人間不信に陥ち入り、誰とも会いたくなかつた。書くことすら虚しく思えた。そうした日々、不思議に歌だけが出来た。出来たというより、生まれてきたというのが正直な気持だつた。

『幻花』のあとがきで、私は短歌が救済の器であることを知つたと書いた。散文では表現できない心の領域が短歌にはあつたのだと、しみじみ感じた。

そのとき、もの哀しいように思い出されて来たのは、

「歌を捨てたら駄目だよ。歌を大切にしなさいよ」

寺山修司さんの言葉であつた。

父が逝つて二十年の歳月が経つた。

今後も、私は父を詠い続けるだろう。何故なら、この世からあの世の岸辺へと涉つてしまつた父に、歌でしか出会えなくなつてしまつたからだ。